

有資格のディアドクターのような誰かをめざして

医療法人楠風会 小出医院院長
小出（泉）佳代子
（佐賀県17期）



平成28年(2016)に宮城県北部の登米(とめ)市登米(とよま)町でちいさな医院を開いた。前任の公立診療所から当地での勤務は9年目になり人生で最も長い勤務地になった。元々何のゆかりもなかったこの場所で個人開業するとはちょっと前までは全く思いつきもしていなかったので人生は不思議だと思う。

この原稿を書いている令和3年(2021)5月に放送開始となったNHK連続テレビ小説の前半期ドラマ「おかえりモネ」では主人公が青春期を送る「森の町」として登米が舞台となり、町の能舞台や武家屋敷の通り、夏にラジオ体操した北上川の堤防、私の自宅のある森林や空が美しい映像として毎朝届けられ、地元の人々の心を潤している。卒業生の高橋裕一先生の大事な故郷でもある人口5000に満たないちいさなふるい城下町で暮らしてきた人々にとって、私も含め、画面に映される町の風景は思いがけなく美しかった。地産のきゅうりは味が濃くて品質が高く、同期卒業の佐々木直英先生が学生寮への差し入れをした際に喜ばれたと聞き、自分は何もしていないのに嬉しくなった。他にも名産は多くあるが、これを機会に他県の学生さんたちも登米の地名と場所ときゅうりの味を覚えてくださるとありがたい。

今回卒業生として「総合医としての在り方」というテーマを頂いた。私自身が総合医であるのか、そのことで発言してよい者なのか、実は非常に悩ましいのだが、これまで育てていただいた関係者のみなさまへ謝意をお伝えできる機会となればと思い、言葉を選んで

いる。
内科・小児科の一般診療・在宅での訪問診療、を出来る範囲ですこしずつ行う日々を過ごす。小学校中学校高校、保育園幼稚園託児所、と町内の校医もやらせてもらっている。来院する患者さんは0歳の赤ちゃんから100歳の高齢者までにおよび、その生活の傍らにいて人生の時間に関わらせてもらう仕事は、思えばやりたいと思ってきたことである。それを生業として生活できている今をただありがたいと思う。

赴任当初ちいさかったこども達が大きくなっていく姿も見られるようになってきた。同時に、元気良く通院していた方が徐々に動けなくなってきて訪問診療に切り替え、看取ることもすこしずつ増えてきた。

今、外来や訪問で診る高齢の患者さんの多くは大正末期から昭和初期生まれの人々で、それはそのまま自分の両親の年齢にあてはまる。徴兵されシベリア抑留を経て帰還し、炭鉱の最盛期に胃潰瘍の治療をしつつ細い身体で働き続けた大正生まれの父と、長年公務員の仕事をこなしながら遅く生まれた私を育てた理屈っぽい昭和一桁生まれの母に、目の前の患者さんたちはいつも重なる。家族の歴史も色々あり、直接できなかった親孝行らしいことを、私は仕事で人様に還元して帳尻をあわせているのかもしれないと思うこともあるが、それはそれである。ここで私が出来るとは限られているが、その中で出来ることをこれからも続けていきたいと思っている。

私にとっての訪問診療と看取りは、一般診療の延長にある。社会における医療事情の変遷やそれぞれの医療者にとってその位置づけは変わってくるのであろうと思うし色々なやり方があるほうがよい。だが、「ずっと診てきたから、来られなくなったらお家へ診に行くし、ずっと診てきたから、できれば最期まで診たい」という尊敬する登米の先輩・木村康一先生の言葉があり、つまるところは私にとってもそれが実践したいことであり、それをやっている日々でしかない。高齢者の患者さんがご自宅での急変で救急・警察が出動する状況になり、その後私のところへ確認が来ることもある。できれば検案書ではなくて診断書を書かせてほしいというこちらの希望が、必要条件を満たせば理解してもらったうえで連携が徐々に可能になってきた。ありがたいことである。

地域のこどもたちが赤ちゃんの時代からおおきくなっていく成長も見せてもらいながら、予防接種をし、学校健診に出向き、風邪や感染症やアレルギーの治療をする。ここには後期研修から数年にわたり仕事させてもらった小児科医としての数年間が確実に役立っている。こどもたちも含めた4世代にわたる家族ごとの関わりの中で、それぞれのご家庭の事情も踏まえつつ、使いたい福祉制度の利用や受けたい医療の方向や範囲の相談に乗り、選択のお手伝いをする。育てる親世代、祖父母世代の1次診療とスクリーニング機能も持ちたいと思い、通常よりやや広めの診療範囲を決めている。時により、事例の相談を専門医の同窓生にすると、「それは一般医がやることとしては、専門医である自分は『医害』だと考えている」という言葉を貰うこともあるがそのような真摯なやりとりをもらえることに感謝し、肝に銘じていたいと常に思う。地域により受けられる医療は現実的には残念ながら差があり、その現状と2次・3次施設との立地や関係性も踏まえたうえで、なおかつスタンダードを維持できるかどうか、毎日自分に問いかけながら、自分が取れる責任の範囲を最終的には自分で決めていくしかないのだと思う。

当地は機動力が高い地域病院の歴史がいくつもありながら、色々な事情が重なり、開業までの数年間は1次と2次診療との連携が必ずしも機能していない医療圏であった。それも覚悟の上で、できることをしようと決めて始めたのは事実である。いざとなればスタッフとゼロから受け入れ先を探した時期もある。しかし幸運なことに、この数年でその状況はずかには確実に激変し、2次病院は訪問診療患者さんの後方支援体制まで含めたバックアップが期待できるまでに変わった。がんばってればいいことがあると思う。ほんとう

にありがたい。2次、3次の医療に関わる自治医大卒業生も多いと思うが、その医療に常に敬意を払いながら日々の1次診療に携わることを、スタッフともども忘れないでいたい。

NHKの連続ドラマの中で主人公が知り合いの若い医師に「先生はどうしてお医者さんになったのですか」と尋ねるシーンがある。私を含め、職場体験の中学生やその親御さん、一般の患者さんからも挨拶のようにこの質問をされる機会は度々あると思う。18歳の佐賀の郡部（今は統合され市になった）の高校生だった私は、離島での医師の仕事がしくて自治医科大学に進学した。しかし元をたどれば、壺井栄さん原作の「二十四の瞳」のアニメをTVで見て離島の分校の教師になりたいと思い込んだのが始まりだった。調べてみると昭和55年（1980）10月に1日だけ特番のアニメとして放送されているこのお話は（主人公の小学校教諭・大石先生の声は倍賞千恵子さんである）、昭和29年（1954）に映画化されてから幾度となく映画にもドラマにもなっているが、私のなかではこのアニメのなかで薄いブルーのスーツを着て自転車で通勤する大石先生が原型で、島でこどもたちと本気で過ごす大人になりたい、と何故か強く思ったのであった。中学時代に教師には向かない自分を分析していったん途絶えた離島の仕事という選択肢が再び現実味を帯びるのは高校に入学して最初にできた友人に自治医科大学の存在を知らされてからである。卒業後県内の離島診療所勤務が義務としてあることはもちろんであるが、両親から早く離れて自立した生活を手に入れたかった私には、学費と生活費を親に頼らず済むことも大きな動機となり、より受験に立ち向えた。高校で1学年上の江口和男先生から詳細な情報を貰えた幸運もあり無事に入学を果たすのだが、入学後は勉強にあまりエネルギーを注げず、成績はずっと低空で卒業も危ぶまれて多くの人に心配をかけた。

平成6年（1994）に卒業し、県立病院でのローテート研修、佐賀県北部玄界灘にある加唐島診療所に3年の勤務後、佐賀大学小児科医局にお世話になり大学病院や九州病院で後期研修しその後地域公立病院小児科勤務、などを経て、今後は模索していたとき、同期の友人が勤務していた鹿児島県種子島の病院勤務を選んで平成22年（2010）に赴任した。小児科医としての毎日とその地域と育っていくやりがいのある仕事であったが、こどもたち「だけ」ではない人々を診たいと思った。外来、入院、内科の検査、救急外来での小外科治療、訪問診療。多忙だったがどれも充実していて、ここが自分のHomeだという思いもあり、一緒に来て島で入学したこどもが高校を卒業するまで12年くらいは勤務しようと考えていたのだが、残念ながら1年半で出ることになる。周辺事情で居たくても島を出なければならないことを図らずも経験した。島の勤務を始めて1年が経とうという3月に東日本大震災が発災し、その際に応援に入ったことがきっかけで現在に至る。同窓会のプロジェクトが立ち上がったとき、まだ安否がわからない同級生を案じながら（無事であった）、当時一緒に仕事をしていた同期の伊瀬知敦先生と「ここで参加しないのは今までとこれからの自分たちの人生に矛盾するよね」と話してエントリーし、岩手県の県立釜石病院への応援派遣で発災3週間後の現場に入らせてもらった。その後、宮城県の拠点も見て

おきたいと思って訪れたのが、南三陸町のバックアップ医療圏であった登米である。その時はまさか10年後に自分の拠点を作ってここで診療しているとは思わない。宮域に来たのは数年以上かかると思われた震災からの経過を自分で見ておこう、もとよりの医療過疎には自分の特性に合うニーズがあるだろう、と思ったからである。内科医でも小児科医でもない怪しげなよそ者の医者である私に対して厳しい意見を持つ人も当然だが一定数いた。きれいごとでは済まないことはどこにいても何をしていても同じであろう。それでも黙って日々のことをしていれば理解者は自然と増えていき、そんな人たちと今は一緒に毎日の仕事が出来ている。

毎日ただ日々の仕事をごんぱろうというだけで数年間を過ごしていた令和2年(2020)、世界を新興ウイルスが席卷し、予想不可能な毎日に診療現場の人々が追われる中、私は家族が稀少疾患を発症した為に、出産以来の長い休暇を取った。感染症の前線で友人たちが身体を張って働いているのを知りながら自分はあまり役に立てない申し訳なさも、稀少疾患であるため情報が少なくなかなか終わらない治療に叫びたくなる患者家族としての恐怖や憤りも、初めて味わった。そしてそんな状況を助けてくれた中には、不在のバックアップを黙って引き受けてくれた先輩、真摯に相談に乗って諦めずに治療をしてくれる同期や先輩、と自治医大卒業生が何人もいて、また、地元医師会の先生方や訪問看護ステーションや福祉関係者、何より不在の業務を支えてくれた医院スタッフ、と多くの支えがあり、今私は少しずつ通常の業務の毎日へと復帰しつつある。自宅にいる時間が多かった昨夏、部屋で家族と映画をたくさん観た。その中にずっと見逃していた西川美和監督・笑福亭鶴瓶さん主演の「ディア・ドクター」がある。僻地の山村の診療所で信頼されていた中年の男性医師が、実はニセモノだった物語である。多くのことを含みながら重過ぎない仕上がりの作品に唸りながら観たが、実は私自身もニセモノみたいなものかもしれないとずっと思っている。ニセモノは法に触れるのでよくない。有資格で法務的な安全を期して、日々変わる標準の医療を維持する義務は最低限必要なことなのは言うまでも無い。だが人間というものはそもそもあいまいで、生活に安心を与える重要な物事にはあいまいなものが多くあり、やさしい嘘が時には必要であることも事実である。有資格で標準であることを土台に維持できるよう努めながら、地域のひとの生活のニーズにはいつでも応えられる医療者でありたい。

提言でもなくただ日々を綴る散文になってしまった。多くの先達が実践されてきたことであり現在精力的に地域で活動している先生方を差し置いて恐縮至極であるが、若い学生さんや先生でそんな現場を覗いて見たいと思う人がひとりでも居てくれたら、いっしょに森と川と歴史の町を往診に行ってみたいと夢想しながら上梓することにした。

ホンモノかニセモノかわからないくらい生活の傍らでいつの間にかここにおいて、目の前の人を診ること、人々とその生活に相對する日々を続けていくことが、自分出来る医療だと思っている。そしてそれはひとりきりでは決して出来ない。それが総合医かと問われれば、私にとってはそうである。



令和3年（2021）5月：101歳直前の正夫さん（シベリアから帰還したスポーツ好き・現在の趣味はジグソーパズルと通所リハでの懸垂）と